七百人のカナダ人芸術家の手になる作品七千三百点以上の一大コレクションを実現した。このコレクションは、現代カナダの美術制作のほとんど全スペクトルともいうべきものを見せてくれる。このことは、カナダ政府が芸術家・美術館・大衆愛好家のあいだに存在する組織や関係に取って代るのではなく、むしろそうした組織や関係を補足することによって美術界を勇気づけた一例にすぎない。

テレビ●本や映画や放送は、もっと複雑な問題を政府に提起している。政府はまず主として放送に関与したが、それは放送の規制が連邦政府の管轄になっているからであろう。テレビの問題は、わが国の文化問題全般を代表する典型的なものであった。カナダの英語放送局にとって、アメリカのゴールデン・アワーの番組を買う方が、自国で制作しようとするよりも安く上るということは明らかだった。一九七〇年までは、カナダの視聴者に提供されるアメリカ製のゴールデン・アワー番組は年ごとに多くなる一方だった。この分野でのカナダ人の創造力は息の根を止められるほどの影響を受け、コミュニケーションと国民的自覚のための最も重要な手段であるべきテレビ放送が、その目的を全く果せないという危機にさえ瀕した。そのため、政府は、カナダの全民間放送局に対して最少限全放送の六〇%をカナダ製番組にすることを義務づけることになった。カナダ国民のほぼ九八パーセントに届くフランス語と英語の二つの国営放送網の場合は、この基準を越えて、カナダ製番組が放送時間の七〇%を占めるよう義務づけられた。また、ケーブル（有線）TVが登場して、米国製の番組が大部分のカナダの家庭に直接送り込まれるようになったことも、以上のような規制の必要性を一層高めている。このことは、こうした外国作品の競争力がいかに圧倒的なものであるか、また、どんなに防衛的措置を講じても、技術の発展には勝てそうもないということを劇的に示している。カナダ人は、他の先進工業社会に生きる大部分の人々と同様に、平均して一日約四時間テレビを視聴するが、これに占めるカナダの番組は三分の一にも達していない。

映画●一〇年前には、長編映画をとりまく状況も、放送のそれと同じくらい悲観的なものであった。映画の配給も興行も外国の会社や外国作品によって支配されていた。カナダ人は、ほとんど長編映画を制作していなかったし、制作したとしても、大部分は多くの人がみることもなかったし、一般の評価も低かった。したがって、われわれの関心は、まず制作欲を高めることに向けられた。その結果、より多くの長編映画が制作されるようになり、その質も向上したが、それらを劇場に送り込む問題は依然として残っている。政府は、カナダの二大興行チェーンと、一年のうち少なくとも何週間かはカナダ製長編映画を両チェーンの映画館で上映するという約束をかわしている。また、政府は、カナダの大手配給会社についても、カナダ映画産業の発展に大きく貢献するよう期待を寄せている。しかし、放送で達せられたカナダ化のレベルに到達するには、なお長い道のりが残されている。

出版●ある意味では、この分野の見通しにはもっと明るいものがある。というのは、カナダ人の作家たちがすでにたいへん良い、よく売れる本を出しているという確かな市場証拠があるからである。カナダの書店は、カナダ人作家の書いた本を店頭に並べ、そのうちいくつかについてかなりの売上げを得ている。カナダ国民がカナダ人の著者による本を読みたがっており、かつ、そういった本に金を費すのを惜しまない気持があることは確かである。

しかし、見落してならないことは、国内で大変好評なカナダ人の出版物は、その多くが外国出版社のカナダ子会社によって出版されているということ、しかもそのカナダにおける主たる業務が親会社の出版物の販売にあるという事実である。カナダの出版物を主体として営業しているカナダ人所有の出版社の国内市場シェアは、二五%にも達していない。

カナダ人としての自己認識

こうした政府介入の主たる効果は、カナダの文化的作品に棚の一角を確保することにあった。その中心には、カナダ人芸術家がカナダで暮し、仕事をし、名声的にも経済的にもある程度成功する機会を得、また、カナダ人が彼らの作品に接する機会を得るという考え方がある。これらの措置はすべて効果的であったし、実際、カナダの芸術界が生きのびるためには必要なことであった。ただ、こうしたことは成長と自立のためには適当ではないと思っている。

以上のことから、現在われわれが直面している課題が浮び上ってくる。われわれは今、国家的存在の事実を再評価しているところである。その要点は、先にワシントンでトルドー首相が述べたように、相互依存の世界の中でわれわれ自身の運命をできるだけ自分たちで決めたいということである。これは、積極的かつ内省的な挑戦である。われわれの関心は、国民全体としての自己認識を育てることと、さらには、自分自身や国についてのわれわれの考えを反映する文化的表現の健全な発達を促すことにある。それは、他の文化を否定したり、アメリカ合衆国と分かち持っている価値基準を拒絶したりすることを意味するものではない。

われわれの国民全体としての自己認識が脅威にさらされているという事実は、今も変わりない。もしこのような散文的な